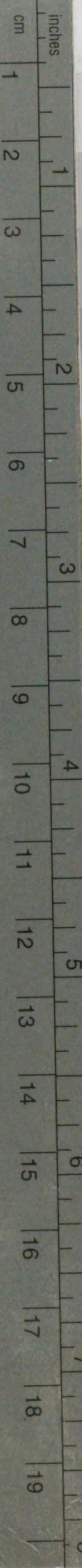


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches



法華問答

日下大癡

法華問答

日下大癡

目次

第一章 存覺上人と法華問答	三
第二章 この書の大意	五
第三章 題號について	六
第四章 第一問答	八
第一節 問	八
第一項 爾前無益の難	八
第二項 觀經非一乘の難	一〇
第三項 念佛無間の難	一一
第二節 答	一一
第一項 爾前無益の難を破す	一一
第二項 念佛無間の難を破す	一四
第五章 第二問答	三
第一節 問	三
第一項 爾前方便の難	三
第二項 己身彌陀の難	三
第三項 念佛無間の難	三
第二節 答	三
第一項 念佛無間の難を破す	三
第二項 爾前方便の難を會す	三
第三項 己身彌陀の難を斥く	三
第六章 第三問答	三
第一節 問	三
第一項 善導大師の釋を會す	三
第二項 法然上人の釋を會す	三
第七章 第四問答	三
第一節 問	三
第一項 經文相違の難を會す	三
第二項 道理相違の難を斥く	三
第三項 闍王興逆は法華時に非ずの難を破す	三
第四項 提婆品の文を會す	三
第五項 觀經を爾前教とする難を斥く	三
第八章 第五問答	三
第一節 證文有無の検討	三
第一項 問	三
第二項 答	三
第二節 本懷淺深の比較	三
第一項 問	三
第二項 答	三

第一章 存覺上人と『法華問答』

『法華問答』は本末二卷になつてゐる。二卷の中、何處にも撰號を載せては無いけれども、存覺上人の眞撰であることに疑は無い。存覺上人が曆應元戊寅の年、四十九歳の春に備後に下向あらせられた頃にあたり、同國に於ける日蓮宗徒から淨土眞宗に對する種々の謗難が起り來つて、眞宗念佛の弘通に大きな障礙と爲り、御一流門末の困却は少からぬものがあつたのである。其時存覺上人は己むを得ず假りに名を悟一と稱し、同國守護職某の邸内に於て、日蓮宗徒に對し法門の問答を交へて、彼の謗難を摧破し御一流の正義を顯揚せられた。そして釋尊出世の本懷は念佛の一法にあり、畢竟成佛の利益は弘願眞宗にある事を闡明されたのである。『法華問答』は是を筆録したもので、その時上人の滞在なされた御宿、同國沼隈郡山南の光照寺の願に由て撰述せられたのである。此時期に亦同寺の願に由り御製作の『決智鈔』と名けられたる御聖教がありて此『法華問答』と俱に『眞宗法要』及び『假名聖教』に編入されてゐる。『法華問答』も『決智鈔』も、ともに日蓮宗の來難に對する聖教であるから、兩書を對照して味讀する必要がある。『決智鈔』は初に、釋尊一代所説の佛教には難行道聖道門と易行道淨土門と有りて末法五濁の世に生れた罪障重く根性拙き凡夫の救はれる道は、易行道淨土門の念佛往生の一道の外

にはない事を述べ、次で是に就て縷々二十一問の問答を設けてある。是は備後に在つて日蓮宗徒の妨難に當られた時に、眞宗念佛門の立場を明かにされたものと窺はれる。然に今此『法華問答』に於ては、最初から問答を以て筆を進められてある。其の問答は法華宗徒との對決を筆録されたものであるだけに、非常に微に入り細を穿つてある。

此書には三卷本もあるけれども、其中卷は『決智鈔』の後半と全く同じい由て、『眞宗法要』も『假名聖教』も、其中卷を除いて本末二卷としたのである。又此書には漢文の寫本も傳はつてゐるが、存覺上人の御筆録は『眞宗法要』及び『假名聖教』に編入されてある通りの假名交り文であるのを、後人が漢文に寫し改めたのである。斯る例は、存覺上人撰述の『歩船鈔』（和文）にも漢文化の傳寫本がある事に見ても知られる。

## 第二章 この書の大意

此書にあらはれた問答は、實に複雑多岐に亘つてゐるが、其詮す所を一括すれば、法華に對して念佛が勝れてゐるといふことである。而して數々の問答も大別すれば五つになる。初の問答は概説で、此概説中に次の如き三つの來難を擧げて、其破斥をなされた。(1)『法華經』以前の諸の經説は、方便教で利益はあるまい。(2)念佛往生の教は一乘ではあるまい。(3)念佛は無間（地獄）の業であらう。

第二問答から第五問答までは別論で、第一問答から導き出されたものである。別論の四問答の内、第一は念佛無間の難に答へると共に、餘の二難をも釋いてある。第二は善導・法然二師が謗法の罪人であるとの難を駁し、第三は『觀無量壽經』が『法華經』と同時期に説かれた經典では無いといふに答へ、最後に淨土教が釋尊出世の本懷では無いとの難を通釋せられてある。

要するに此書の大意は、唯念佛の一法のみが特秀な勝益のあることを顯揚するに存する。

## 第三章 題號について

『法華問答』の法華とは『法華經』から來た名である。日蓮宗は『法華經』に依つて開いた宗旨であるから、法華宗とも呼ぶ。『法華經』に依つて立てられた宗旨に天台宗もあるが、其宗義は兩者大に異つてゐるので、天台宗を天台法華と呼び、日蓮宗を日蓮法華、亦は略して法華宗とも稱してゐる。そして今この御聖教は、法華宗と念佛宗との問答を其儘記載された書であるから、『法華問答』と題するのである。

此題號に因んで想ふべき事は、日蓮上人入寂の後に、遺弟日昭の編纂した上人の遺文中に存する『録外御書』の十卷目に、『法華問答抄』と名ける一書がある。此『法華問答抄』は文永九年の製作に成り、親鸞聖人の御往生後十一年に當るから、存覺上人はこれに對抗して此『法華問答』の題號を置かせられたのであらうと伺はる。しかし『法華問答抄』だけを、對手とせられたのではない。日蓮上人の遺文としての『録内』及び『録外』(日蓮上人の滅後、日昭が遺文を蒐集して師の一周忌までに目錄に列ねたものを『録内』といひ、その時洩れたものを『録外』といふ。)全六十五卷を精讀せられて、其中、念佛門に對する種々の謗難を研究検討された後の宗論であつた事は、此御聖教の内容を熟讀すれば明かである。

凡そ宗論の對決は博覽強記の人のみ能くなし得る所であるが、存覺上人の博學多聞にゐらせられた事は、此御聖教を拜讀する者の三嘆してやまない所である。此書に博く引かれた諸種の文書のうち殊に注意すべきは、『砂石集』の著者として有名な無住法師との交渉である。無住法師は存覺上人よりも年長であるが、上人が四十二歳の頃、法師は東福寺山内普門院に閑居して、互に屢々往來された。其著『砂石集』は日蓮上人入寂後一年の弘安六年に成つたものであるが、其中處々に日蓮の念佛誹謗が批判されてゐる。即ち、法華の四種三昧には彌陀を本尊とし、彌陀の名號を稱ふる事を其行とするからには、法華と念佛とは相反すべきものでなく、一具の法門であるのに、此頃法華弘通の人が念佛を誹謗するのは、法華自宗の祖師天台大師の意に背いて居ると批評し、時に日蓮上人の念佛誹謗を攻撃してゐる。それに引證せられた諸文を『法華問答』に引用なされてゐるが、無住法師云くとも『砂石集』に云くとも記してはなないけれども、自家主張の一部分になりとも共鳴する無住法師のごとき徳者を宗門外に見出して、以て第三者の公平なる説として擧示されたものと伺はれる。これは當時旭日昇天の勢にあつた日蓮法華の法難に對抗せられた上人の、並々ならぬ苦心と用意の程を拜察し、また上人の深智博覽にあらせられた事をも仰ぐに足る一例である。のみならず問答對決が如何に火花の散る如くに激しかつたかといふ事も、是に由て偲ばる。此書は眞宗幾多の御聖教中にも類の稀な問答の實録であるから、以下本文の講讀には粗略ながらも、勝めて問答對決の順序を尊重して講を進める事とする。

## 第四章 第一問答

### 第一節 問

#### 第一項 爾前無益の難

(1) 日蓮宗の立義 先づ釋尊一代教に對する、日蓮法華宗の見方を略述すると、凡そ釋尊が此世界に出で給ふた其本意は、唯『法華經』を説く事にある。過去久遠の昔から三世に亙つて數多の諸佛が誕生なされたが、其中には最後に『涅槃經』を説き給ふ佛もあり、説き給はぬ佛もあるけれども、『法華經』を説かずに入滅なされた佛は一體もゐらせられぬ。然に『法華經』には一切衆生の「開・示・悟・入」といふ事が有つて、是が即ち眞實の佛敎を開顯されたものである。爾前(『法華經』の說法より前)の經典は皆未だ此眞實を開顯してないから、釋尊の方便説で成佛得道の法では無いと斷定する見方である。「開・示・悟・入」とは、釋尊成道より御年七十二歳に至らせられる迄の四十餘年間に、爾前の佛説を聞いてゐた弟子たちが、各自に實相の妙法を本來具足してゐながら是を知らず是を教へても機縁が熟しないから是を信じなかつたので、釋尊は爾前即ち華嚴・阿含・方等・般若の四時の教を説かせられた。而して凡夫でも修行を勵み煩惱を斷ずれば、聲聞・緣覺の二乘に爲り、二乘から進んで

菩薩に、菩薩から進んで終に佛に成り得ると次第を立て、導き給ふたのであるが、御年七十二に及んで佛弟子だちの機縁が圓熟したから『法華經』を説き、始めて眞實の佛敎を開顯せられた。即ち凡夫が二乘を通過せねば、又二乘が菩薩にならねば眞實の佛法は自得出来ぬと教へたのは方便説で有たので、凡夫は凡夫ながらに其身も心も實相である、二乘は二乘の儘で身心即實相である。事としても理としても、十界(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩・佛)圓具の實相妙法であるから、始めて是を聞いた者でも疑ふことが無ければ五乘(人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩)皆本來佛法であると、衆生が本來圓具する所の實相妙法の功德を説き、衆生の蒙を開いて是を示し、是を悟らせ、此實相に證入せしめる事を「開・示・悟・入」といふ。此「開・示・悟・入」を説いたのは『法華經』のみで、是こそ眞の佛敎であるとするのが日蓮上人の見方なので、此點には支那の天台大師智顛も同じ見方をして居られる。それは『法華經』の明文に「開・示・悟・入」といふことも出てをり、此經が眞實敎であるといふ言も顯れてゐるからである。然に天台宗では諸法實相の開顯に基いて、爾前の方便敎も亦佛法の外なく、權方便が即眞實であり權實不二であると、釋尊一代の説敎を『法華經』に融會して、彌陀法をも尊重して念佛をも合修するのである。同じ『法華經』に依つた日蓮宗は是に反して、爾前の諸經は皆方便敎であると主張すると共に、淨土の『觀經』は天台の所謂五時敎の中の第三時方等部中の經典ゆへ、爾前の方便説で、念佛成佛の法は無得道の權敎であるとするのである。

(2) 彼宗の引證 第一問答の劈頭にも、今此主張を以て問難を立て、是を立證する爲に彼の宗徒は二つの經文を引用してゐる。即ち一には『法華經、方便品』勸信の偈文で「如我昔所願、今者已滿足、化一切衆生、皆令入佛道」と説かれてある。此文の意は、自分(釋尊)は最初から、此法華經を説いて衆生を化益する事を目的としてゐたけれども、機縁が熟しなかつたから、思ふ様に此經を説き得なかつた。然に今機縁が圓熟したから、此經を説く事を得て、我が昔の願が満足して、衆生を佛道に入らしめた事を喜ぶと言ふたのである。翻つて爾前の諸經を見ても、その中には未だ曾て斯様な文が無いではないか。二には『無量義經說法品』の文である。『無量義經』は『法華三部經』の第一序分經で、此經には「四十餘年未顯眞實」と説いてある。未だ眞實を顯さずとあるからには、『法華』已前は方便説のみである。方便説である以上、それに依ては眞に得道出來ぬではないか。かくの如く、二經の文を見ると、眞に得道の利益ある教は『法華經』のみで、爾前の諸經典は皆無得道の方便教でなくてはならぬと主張するのである。

## 第二項 觀經は一乘に非ずとの難

次に『觀經』は一乗教でないといふ難を立てゝゐる。日蓮宗の見方では、『法華經方便品』に「十方佛土中、唯有一乘法、無二亦無三、除佛方便説」とある文を偏執して、唯『法華經』のみが三乘の異なくして一乗教であり、是を大乘とも名けるのであると斷定する。『觀無量壽經』の説相を見ると、中三品の機が淨土に生じて四諦の法を聞き、小乗の果を證すると説かれてあるから、彼の淨土は方便土でなくてはならぬ。随つて『觀經』は大乗教でなくて小乗教である。二乘・三乘は佛の方便説であるから、『觀經』も亦方便教であると斷定する。そして爾前の權方便の教たる『觀經』等に依つて宗を立て、大乘教と號して念佛往生を勧めるのは不可であると難じてゐる。

## 第三項 念佛行者は無間に墮するとの難

更に念佛は無間の業であるとの來難がある。念佛無間(念佛は無間地獄に墮ちる惡業であるとの意)は、日蓮上人が諸宗を折伏した四種の格言の一つである。四種格言とは「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」といふ宣言である、是を以ても日蓮上人が如何に戰鬥的な性格の持主で有つたかを知り得やう。然に、日蓮上人の所謂「念佛無間」には二つの意が有つて、第一には、念佛行者が『法華』を誹謗するから、其謗法罪に由て無間地獄に墮ちるとの意で、第二には、念佛其ものが無間の業であるとの意である。今の來難は其第一の意で爲されたのであるが、此點に關する問難と其辯駁は第二問答に至ても尙細密に繰返されてある。次下の答破に於ても、上述の三難の中で主に「念佛無間」の難を破り、前の二難は傍に答へられてある。『決智鈔』にも「念佛無間」の難を摧破してあるが、是に由ても日蓮宗から向けられた攻撃の焦點を察することが出来る。

## 第二節 答

## 第一項 爾前無益の難を破す

(1) 道理に違するを示す 上述の來難の中に於て、先づ爾前の諸教に利益なしとの難を破り、其理に違ふ事を示された。凡そ佛は衆生の根機に隨ふて、教法を説き授け給ふので、機縁は千差萬別であるから、教法も亦小乗と大乘との相違、菩薩藏と聲聞藏との差別、又は漸・頓の二教、或は權・實二教の不同が立つけれども、此佛説法教化の勝縁に遇ふ者は皆解脱を蒙むる。若し此理に反して、爾前の諸教を無利益とするならば、四十餘年間の釋尊の説法は悉く虚説で有つた事になるだらう。然に佛語には決して無利益な御説や虚妄な御言のあるべき理はないと、理證せられたのである。

(2) 經文に違するを斥く 次に經釋の文を引いて爾前無益の難を破斥なされた。茲には左の四種の文が引用されてゐる。(一)流通得益の文、凡そ何れの經典にも、序・正宗・流通の三分段がある。此中、流通分は得益があればこそ説かれたので、若し無益の教であるならば流通分はない筈である。但し爾前の教中には二乗の作佛を明してないが、小乗經ならば聲聞の四果の如き、各其經當分の得益がある。のみならず『梵網經』及び同經の『天台疏』の如き、菩薩の受記(將來必ず成佛すべきことの豫言を佛より受けること)を明かに説いてあるではないか。

(一) 爾前得益の文。『法華經、譬喻品』には「われ昔、佛に隨ひて、是くの如きの法を聞き諸の菩薩の受記作佛を見たり、然に我等此事にあづからずして、甚だ自ら感傷す」と説いてある。天台大師は是を釋して、「昔」とは『思益經』や『維摩經』等の説時で、方等部の經中にも菩薩の受記は有つたのである。「如是法を聞いた」といふのは大乘の實慧(『法華經』所説の佛知見と同じ)を聞いたとの意味で、二乗成佛の授記は『法華經』のみに説かれてあるが、菩薩の受記は爾前にも有つて、菩薩は『法華經』に限らず處々に得入すると解釋してある。かくの如く經釋には爾前の得益を明かにしてあるではないか。

(二) 妙字の釋文。『妙法蓮華經』の妙字を、天台大師は「此妙彼妙、妙義無殊」と解釋なされた。此妙とは『法華』のことで、彼妙とは『華嚴』等である。(爾前四時—華嚴、阿含、方等、般若—の中、第二阿含を除く)天台の釋によれば、抑々妙とは圓實の教體であるから、教體は彼此全く同じといふ意を示してゐるではないか。

(三) 『無量義經』の文。是は前に彼の宗徒が問難立證の爲に引いた經文であるが、今彼の立證を返破し給ふのである。其意は『無量義經』の始終を見ると、爾前の諸經は衆生の根性が區々で有つて未だ圓熟してゐなかつたから、一切衆生皆成佛の眞實を顯さなかつた、けれども爾前の教は其得道の差別が有つても、各々得益がある。譬へば水は江河、池溪、井渠、大海等各異りながら、而も垢穢を洗ふ事に至ては皆同じいが如くであると説いて



ある。既に衆生の得道差別を説いてあるからには、爾前にも得益ありと言ふ意でなくてはならぬ。然に此文を證據にして爾前無得道無利益といふは妄説であると難破し給ふたので、更に下第二番問答に至つて詳細に説かれてゐる。

## 第二項 念佛無間の難を破す

(一) 總破 前の第一難問の中には、(イ)爾前無益の難と、(ロ)『觀經』は一乘に非ずといふ難と、(ハ)念佛無間の難との三難が有つた。そして其難を答へるのに、上來(イ)爾前無益の難を破斥し終つたから、茲には、(ロ)『觀經』は一乘教に非ずとの難に答ふべき順序であるが、それは下第二番問答に至て答へられるのであるから、今は、(ハ)念佛無間の難を特に重要視して、急いで是を返破なされて、先づ念佛は無間の業であるとは、如何なる經典、如何なる菩薩の論書に據つて主張するのか、斯様な惡義の主張こそ阿鼻地獄に墮すべき罪業であれ、最も憐むべき過咎を犯す者であるぞと總破なされたのである。『決智鈔』には「念佛ノ行ハ地獄ニ墮スル業因ナリト説キタル文アラバ、ソレヲイダサルベシ。シカラズバ、會通ニオヨバザルモノナリ」と強烈に彈斥されてある。

(二) 念佛往生の文證を示す 上の總破で、念佛は無間の業であるといふ難には文證の無いことを突きとめられたのであるが、今は其逆に念佛往生の證權として、眞宗正依の經論及び餘他の經論釋の中から二十一文を擧げられてある。

(一) 『法華經、藥王品』には「釋尊入滅の後、後の五百歲中に、若し女人有つて、此經典を聞いて説の如くに修行すれば、是處に於て命終して即ち安樂世界に往き、阿彌陀佛が大菩薩衆に圍繞せられて住し給ふ所の蓮華中の寶座に生れる」と説いてある。『決智鈔』にも此文を引いて問答を設け、次の如き解釋をされてある、即ち「淨土門ニヲイテ、諸行往生・念佛往生ノ二門アリ。イマ『法華』ノ説ハ、ソノナカニ諸行往生ノ門ヲアラハスナリ。コレスナハチ『觀經』トクトコロノ三福ノナカニ、讀誦大乘ノ行ナリ。シカレハ定(息慮凝心)、散(廢)惡修(善)、弘願ノ三門ノナカニ、定散ハ能顯ノ方便、念佛ハ所顯ノ眞實ナルガユヘニ、カノ『法華』ノ讀誦大乘(散善)の中の一つ)ノ行ハ『觀經』ニ入りテ終ニ念佛往生ニ歸スベキナリ」と解釋し、更に「顯ニハ讀誦大乘ノ往生ヲトクトイヘドモ、密ニハ念佛往生ノ義ヲフクメリ」と喝破されて有る。

(二) 『觀音授記經』には「唯一向に専ら彌陀を念じて、往生する者のみ有つて、常に彌陀を見奉る」と云ひ、又「若し諸行往生の人ならば彌陀の入滅を見るけれども、念佛往生の人は彌陀が常に現在して入滅し給はざる眞の報身を拜見する」と説き、(三) 『坐禪三昧經』には「極樂の教主彌陀尊が念佛の諸の衆生に隨順して、毎日千遍住處に來りて踊躍歡喜し給ふ事、譬ふるに物なし」と説いてある。(四) 『華嚴經』には「命終する者念佛すれば、必ず佛前に生れて佛を見奉る」と説いてある。(五) 又同經には、「願はくば我命終らんとする時に臨んで、悉く一切の諸の障除いて<sup>まのあた</sup>面り彼の阿彌陀佛を見奉り、即ち安樂國に往生することを得ん」と説いてある。

(二六)『十往生經』には若し衆生有つて阿彌陀佛を念じ往生を願ふ者は、彼の佛即ち二十五菩薩を遣して行者を擁護し、行住坐臥、晝夜一切の處に惡鬼神をして其便りを得しめ給はず」と説いてある。(七)『隨求陀羅尼經』には「淨土往生の因行が退轉せねば、決定して上々品の淨土に往生す」と説いてある。(八)『尊勝陀羅尼經』には「毎日是を誦すれば、阿彌陀佛國に往生す」と説いてある。(九)『起信論』に、「若し人専ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じ、所修の善根を廻向して彼の世界に生れんと願求すれば、即ち往生を得しむ」と説いてある。(十)『金剛經、發願の文』には「上は四重の恩を報じ、下は三塗の苦を救ひ、若し見聞すること有らん者は、悉く菩提心を發して此一報身(一生涯の果報の穢身)を盡して、同じく極樂國に往生せん」と言つてある。(十一)『寶性論』には「此諸の功德に由て、願はくば命終の時に彌陀佛の無邊なる功德身を見る事を得て後、離垢眼を得、無上菩提を證せん」と説いてある。(十二)『攝大乘論』(世親菩薩の釋論)には「大乘を讚嘆する功德を同向して、願くば佛を見奉り清淨眼を得て、正覺を成ぜん」と言つてある。(十三)『十住毘婆沙論』には「易行道とは但信佛の因縁を以て淨土に生れんと願すれば、佛の願力に乗じて即ち彼の清淨土に往生することを得る。佛力により住持せられて即ち大乘正定聚に入る。譬へば水路の乗船が、陸路の苦なるに反して甚だ樂しきが如し」と説いてある。此文は曇鸞大師の『往生論註』に出てゐるのであるが、抑々難易二道の解釋は、龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』が其根本であるから、根本に歸して『十住論』の名を擧げられたのである。(十四)天台の智者大師は「彌陀法が

八萬法藏の妙の肝心、一代聖教の結經であり、衆生出離の要法である」と云はれた。一代聖教の結經とは、蓋し『阿彌陀經』を意味するのである。(十五)荊溪の湛然大師は「諸經に讀むる所は多く彌陀にある。故に西方に向ひ彌陀を念じ奉るを以て準則とす」と言はれた。(此文は『口傳鈔』にも『決智鈔』にも御引用になつてゐる)。(十六)慈雲法師は「淨土の彌陀といふことが、一たび耳に觸るれば即ち大乘成佛の種子を下す。聞かずば信じないのは大なる失ではないか」と言はれた。(十七)靈芝の元照は「彌陀の教觀は、皆是れ圓頓一乘の法であり、即ち大乘である」と言はれた。(十八)『觀無量壽經』には、聲をして絶えざらしめて十念を具足し、南無阿彌陀佛を稱するに、念々の中に於て八十億劫の生死の罪を除く」と説いてある。(十九)『無量壽經』には「それ彼の佛の名號を聞くことを得て、歡喜踊躍し乃至一念する人あらば、この人は大利益を得、無上の功德を具すと知るべし」と説いてある。(二十)同じく『大經』には「當來の世に經道(聖道門自力教の諸經)が滅盡するであらう時に、我(釋尊)は慈悲哀愍を以て、特りこの經を留めて百歳のあひだ止住せしめやう。衆生有つてこの經に遇ふ者は、意の所願に隨つて皆得度す」と説いてある。(二十一)『思益經』には「劫燒(大の三災中の火災劫)の時、江河先づ滅し大海後に竭す。法滅の時小乗教先づ滅し大乘教後に滅すと説いてある。これを以上(二十)の『大經』の文に見ると、當來の世に經道(聖道門大小乗の經卷)滅盡する時、特り淨土教のみ止住せねばならぬ。そして淨土教を留め給ふ意は、(十九)の『大經』の説の如くに、一念に大無上の功德を具足せしめ給ふ事に

あるから、念佛は大乗中の大乘でなくてはならぬ。それにも拘らず、『觀經』等淨土教の説を大乘に非すと主張するとは何事であるか。『觀經』が若し果して汝の所立の如くに、爾前の方便教で無利益の法ならば、釋尊が慈悲哀愍を以て特に淨土教を留め給ふ理由が立たなくなるではないかと難破されたのである。

(3) 古師を擧げて謗法を誡む。

(a) 天台と光宅との兩師を擧ぐ。天台大師は法華三昧を體驗して、其著『法華文句』の中に光宅寺の法雲法師(梁の三大法師の一人で涅槃宗の碩學)の『法華經疏』の説を破し、更に『法華玄義』には「餘者風を望む」と云つて、光宅すら未だ『法華經』の意味を十分に領解し得なかつた程であるから、其他の光宅以下の人々の學説は、取り上げて問題にする迄もなく自ら破壊されて了つてゐると批判されてゐる。彼の人間に七生して『法華經』を註釋したと傳へられる光宅の如き偉人すら、其經の深意を知り得なかつたのに、況して僅に經文のみを見て其經意を明かに知らず、自見の妄義を骨張して支那・日本の高德祖師の釋を破し、剩へ念佛を無間の業であるといふ徒は出離を求める者ではなくて阿鼻の罪業を造る者と謂はなくてはなるまい。日蓮の『録内』には念佛に歸依された支那の慈恩・嘉祥・曇鸞を破し、又『録外』には日本の弘法・慈覺・智證を破してある。今是に對して支那・日本の高德の祖師の釋を破するとは不埒千萬であると誡め給ふたのである。其理由として次下に弘法と傳教との兩大師の釋及び古德の説を擧げ給ふた。

(b) 法華と彌陀と一體なる事を明す。(一)弘法大師は『法華經』の題號を解釋して『法華經』は觀音の密號である、淨土では彌陀と名け、娑婆世界では觀音と名ける』と云はれた。『法華開題』。(二)古德の口傳に「昔靈山に在つては法華と名け、今西方にあつては彌陀と名け、娑婆に於ては觀世音と稱す」と云つてある。(是は『砂石集』に據つて御引用なされた言で、古德とは蓋し叡山の古德で、智證大師を指す意であらう)。(三)傳教大師は「始の經題の妙法蓮華經から終の作禮而去の文に至る迄、一々の文字は殊妙の理である、皆是れ西方の阿彌陀佛である」と云はれた。

右の如く諸大師の解釋を見ると、法華と彌陀と名は異なるけれども、全く一體なる事は明かである。然ば法華を信する者は、彌陀を尊信すべく、彌陀を信する者は、法華を尊重すべきである。彌陀を信じて法華を謗り、法華を信じて彌陀を謗るのは、恰も流を汲んで源を濁すが如くである。況して天台大師の解釋に反き、獨斷を以て別義を主張し猥に法華宗と號す。斯る宗名も宗義も信用するに足らないのである。

(c) 天台大師の德を嘆じて西方願生を擧ぐ。日蓮上人も已に『録内』に於て、天台傳教兩大師を讀して「昔靈山に在つては藥王と名け、今漢土に在つては天台と名け、日本に於て傳教と名ける」と云はれてある。然に彼宗の立義がその藥王の化身たる天台大師の解釋に反する事を難破する爲に、茲に其德を讚嘆されたのである。即ち、此大師の本地は藥王菩薩で等覺位の大聖である。大師は支那へ誕生なされ、一切經を繰返して十五遍精讀さ

れた高德で有る、斯る大徳の聖ひじりたりながら臨終に西方の往生を遂げられたと『天台大師の別傳』に記されてゐる。この天台大師の往生に就ては議論があるけれども、彼宗第六祖荊溪大師が、天台大師は平素都率天（同天の内院は即ち彌勒菩薩の住處）に願生されたが、臨終には西方彌陀の淨土に往生されたのである」と説明せられて、天台大師の西方往生は、其傳文にも荊溪の説明にも明かな事である。然に極樂往生が果して汝の主張の如くに虚説であるならば、天台大師は何が故に西方往生を遂げられたのであるかと嚴かに返破された。

茲に第一問答は一先づ終つたのである。けれども日蓮宗徒は尙此上に繰返して難問を續けた故に、次に重々に是を返破し決擇なされたので、以下第二問答から後は、今の第一問答の上の細論である。

## 第五章 第二問答

### 第一節 問

#### 第一項 爾前方便の難

日蓮宗徒は更に三重の難問を出した。即ち、(イ)爾前方便の難と、(ロ)己身彌陀の難と、(ハ)念佛無間の難である。此三難中、念佛無間の難が主と爲つてゐる。先づ彼の宗徒は云く、佛・菩薩の諸經論並びに人師達の註釋書を引いて、念佛往生の義を立てたけれども尙明かではない。何となれば、其引用の諸經は皆爾前の教で即ち方便説であり、其方便教に依つて造られた菩薩の論も、人師達の註釋も、皆俱に方便説に屬するものであるからである。『法華經』に對する註釋書でも、人師達の見方は區々で一定しないから、其中で『法華』に合致する説ならば之を用うべきであるが、經文に合せぬ説ならば用ゐてはならぬ。たとへ天台大師の説で有らうとも、悉く用うべき限ではないと、第一問答の答破に就てこの難を立てたのである。

#### 第二項 己身彌陀の難

彼の宗徒が茲に又一種の新問難を出して云く、前の第一問答の時に汝が引用した所の『法華經、藥王品』に説

かれた「即往安樂世界の阿彌陀佛」は、汝が答釋したやうな西方極樂の阿彌陀佛ではなくて、己身の彌陀（凡夫でもその本性は靈妙なる本來の法身佛であることをいふ）である。しかして同品所説の「安樂世界」も亦西方淨土ではなくて、法身の所居に外ならぬと解釋すべきであるから、此文を以て『法華』の歸着する所は念佛に在りと證明しても肯ひ難い。亦念佛往生が眞實教であるとの證據にもならぬと難問を立てたのである。

## 第三項 念佛無間の難

(1) 日蓮宗徒の自義の骨張 次に念佛を無間の業であると云ふのは、直ちに念佛其ものを無間地獄の惡業因であるとする意ではない。念佛を修する行者は、『法華』を誹謗するから、其所修の法としての念佛を能修の機に約して、念佛無間と云ふのであると難じた。此の念佛無間の難は上の第一問答（總論）の解釋中に分別して置いた通り、二意ある中の一つで、今復た茲にその能修の人に約する義を以て、廣く難を構へたのである。

(2) 善導と法然との兩師を難す。

(a) 善導大師を難す 善導大師を彼の宗の徒は次の三點に就て難じてゐる。即ち、(一)讀誦大乘の解釋につき、(二)雜修十三失につき、(三)二河譬の別解別行に就ての難である。

(一)『觀經』に九品の往生を説いて、その上品上生には大乘經典を讀誦する事を往生行の一つとしてある。この讀誦大乘と説いた中には、『法華』の讀誦も籠めてあると思はねばならぬ。然に淨土の祖師善導和尚は往生の

行に就て正・雜二行を立て、念佛一行を正行とし自餘の諸善を悉く雜行と名け（『散善義』『法華』讀誦の妙行を雜行とするのは何故か。

(二) 又『往生禮讚』には、其雜行に於て一人乃至五人の少數の往生を許したけれども、後に至つて「千中無一」と結んである。『禮讚』の當分では、雜行と雜修とは所修と能修の關係として大判され「雜修の者は千中に一人も往生を得ず」と結釋なされてある。のみならず、其雜行について十三失を出してあるが、これみな『法華』を誹謗する者である。『法華經』は三世諸佛の出世の本懷説で、一切衆生成佛の直道であるに。これを雜行に攝して「千中無一」と云へるは一つの謗法ではないか。

(三) 又『散善義』に『觀經』の三心を解釋して其第三廻向發願心の下に二河白道の譬を説き、異學異見別解別行の者を群賊惡獸に喩へてあるが、其別解別行の中に『法華』を洩してゐないのは、何より重い謗法罪であると難じた。

(b) 法然上人を難す 法然上人を難するのに、『選擇集』に就て四難を立てた。(一)讀誦雜行に就て、(二)歴劫迂廻の解釋に就て、(三)廢立に就て、(四)捨閉闍拋に就ての難問である。

(一) 法然上人は善導の『觀經疏』の五種の正行を引き、是に對して第一に讀誦雜行を立て、『觀經』等の淨土の經典以外の大・小乘、顯・密の諸經を讀誦するのを雜行と名けてある。已に大・小・顯・密の諸經と云つたからに

は、其中に『法華』を洩さぬ意であり、是も謗法である。

(二) 聖道門を難證の法として、始には顯大・權大を歷劫迂廻の行とし、後に至り是に準じて密大・實大を存すべしと解釋し、『法華』を歷劫迂廻の行に準じて難證とした。然に『法華』は速疾頓悟の教である。是を歷劫迂廻の法に準ずるのは、亦謗法でなくてはならぬ。

(三) 『大經』の三輩と『觀經』の九品とを照合して得失を判ずる中に「諸行は廢する爲に説き、念佛は立つる爲に説く」と云つてあるが、是も謗法である。

(四) 加之、念佛以外の諸行を「捨閉闍拋」と云つてある。然に『法華經』を捨閉闍拋すべき教と云つたのは、是も謗法でなくてはならぬと難じたのである。

(3) 『法華』と『涅槃』との兩經を引いて立證す。(一) 『法華經』に「もし人信ぜずして此經を毀謗すれば、則ち一切世間の佛種を斷ず」とも、「其人は命終して阿鼻地獄に入り一劫を具足す」とも説いてあるではないか。然るに近代念佛修行の人は、『觀經』の説相に基くと云つて、『法華』を信ぜず、剩さへ雜行の者は往生不可能であると立てる。けれども此經を毀謗する者は、必ず阿鼻獄に墮すとの『法華經』の明了な現文を如何心得るのか。『法華經』を信ぜぬ者は、即ち謗法罪を犯す者である事は自明の理でないか。(二) 『涅槃經』には「不信の者をば一闍提(善根を斷じて成佛せぬ者)と名くと説いてある。既に『法華經』に「若し此法を信ぜぬ者は則ち一切世間

の佛種を斷ず」と説いてあるから、『法華』を信ぜぬ者は謗法と闍提との二種の罪を犯すのである。即ちは無間の罪業でなければならぬ。以上の理由を以て、念佛無間の業と名けるのであるが如何と、難を立證してゐる。

## 第二節 答

### 第一項 念佛無間の難を破す

(1) 『法華』と『涅槃』との兩經の文を答釋す。

(a) 『法華經』の文を會通す 汝の引いた「もし人信ぜずして」の文は、總じて佛法を信ずる心なきを意味したのである。故に『法華』以外の經典を信じて、『法華經』を信ぜぬからとて、それを不信と云つた文ではない。其反證として同じく『法華經』に「若し衆生ありて信受せざらん者は、まさに如來、餘の深法の中に於て示教利喜すべし」と説いてある「餘の深法」とは即ち淨土教を指す意でなくてはならぬ。その故は彌陀の本願も、釋尊の特異斯經も、諸佛の證誠もみな淨土教に限られてあるからである。然るに此明了な「餘深法中示教利喜」の文を見ながら、『法華』を信ぜぬ者は謗法で爾前の教は無利益であるといふ如きは、答ふるに足らぬ妄説である。(餘の深法と云はれたからには、『法華』以外に深法あることは無論であり、其深法に就て諸宗の解釋は一定でないが、今宗から見れば淨土教を意味した文と解釋せねばならぬ)。況や『無量壽經』下卷に「無量壽佛を念じた

てまつり其國に生れんと願じて若し深法を聞いて歡喜せん」と説いてあるに於てをや。此深法とは即ち彌陀の名號である。然るに他の諸經中には未だ斯様な説は一個處も見當らぬ。然ば『法華經』の所謂「深法」とは彌陀の名號法であるといふ事は、想々明かであると云はねばならぬ。此理由を以て、天台大師は淨土の經典をもつて一代聖教の結經と判じ、荊溪師は「諸經所讚多在彌陀」と讚じ、慈雲法師は「淨土の彌陀を一たび耳根に觸るれば、即ち大乘成佛の種子を下す」と釋されたのである。又元曉は『彌陀經疏』に、「兩尊出世の本意、四輩（僧尼と在家の男女）入道の要門、耳に經名を聞き即ち一乘に入りて而も退することなし。口に佛號を誦して即ち三界を出で、而も返らず」といひ、慈恩は『西方要決』に、「不了の教は涅槃の會（釋尊入滅直前說法の會座）に釋通し、淨土の一門は雙林（釋尊入滅の場所）に更に疑決無し。十方の諸佛舌を舒べて印成す。此二義（佛涅槃の會に疑決無き義と）諸佛舒舌證誠の義に由るが故に方便に非ず」と云つてある。又源信和尚の『彌陀經略記』には、「然に信受を勧め願生を成ぜんとする、是佛の本懷なり。輕爾すべからず」と云つてある。以て淨土教が深法と名けられる所以を知らねばならぬ。

(b) 『涅槃經』の文を會通す。次に『涅槃經』に不信の者を闍提と名けた意は、總じて佛法の信なくて因果を撥無する者のことで、同經に「一闍提をば信と名け、提をば不具と名く、信不具なるが故に一闍提と名く」と説いてある。故に彼法を信ぜずとも、此法を信する者は闍提ではない。然に我等は『法華』に就て出離を求めない

が、至心に念佛を行じて而も『法華』に對して誹謗は致さない。

汝の説では、『法華』を信ぜぬ者は誹謗闍提であるとする。『涅槃經』に「蟻子を殺しても尚殺生罪を得るけれども、一闍提を殺すのは殺生罪でない」と説いてある。譬へば嬰兒を殺せば罪を得るけれども、戰爭に軍人が敵兵を殺しても罪にならぬが如くである。然に若し汝の説くに、他教を信じ『法華』を信ぜぬ者は闍提であるとして、是を殺しても罪にならぬと言ふならば、それこそ因果を知らぬ徒ら者であるから、闍提と云はねばならぬと返破なされた。

(2) 善導法然兩師は謗法の人なりとの難を會す。

(a) 善導和尚の釋を會す 次に善導和尚と法然上人との御釋を引いて、以て兩師を謗法の人なりとするのは、全く答ふるに足らぬ問難であると示された。其理由としては、此兩師は共に諸行往生を認めて居られるからである。先づ善導は『玄義分、序題門』に、「心に依つて勝行を起せり、門八萬四千に餘れり。漸・頓則ち各所宜にかなひて縁に隨ふ者則ち皆解脱を蒙れり」と云ひ、「定散等しく廻向すれば速に無生の身を證す」とも云つてある。

(此文は要門と弘願門とに兩通するが、今は要門の意で引用せられた) して見れば、定散二行の外に如何なる行が有つて不生と云はれるのかと雜行不生の粗難を斥け、又『法事讚』に、「如來五濁に出現して、宜に隨ひ方便して群萌を化す。或は多聞を説きて而も得度せしめ、或は少解を説きて三明を證す。或は福慧雙べて障を除くと教へ、

或は禪念し坐して思量せよと教ふ。種々の法門皆解脱すれども念佛して西方に往くに過ぎたるは無し」と云へる文、及び『般舟讚』に、「或は人天二乗の法を説き、或は菩薩涅槃の因を説き、或は漸或は頓に空・有を明し、人・法二障雙べて除かしむ。根性利なる者は皆益蒙る、鈍根無智にしては開悟し難し」と云へる文を引き是を要門の意を以て解釋して、凡そ諸行往生を許す事は善導一師に限らず、道綽禪師は萬行往生といひ、懷感禪師も源信和尚も諸行往生と云はれた。決して『法華』の行を誹謗なされては無いと駁せられた。また念佛等の五種の正行以外の諸行は、西方往生に限らず、人天や二乗に共通し、又は十方淨土にも共通する行であるから、雜行と名けられたので、決して誹謗の意味で立てられた法目ではないのである。凡そ大・小乗の經論中に純雜の二門が立てられてゐるが、雜行を立てる事が汝の難問の如く誹法であるとするならば、經論中に純・雜を立てゝあるのも、亦皆誹法と云ふのであるかと例難を出して返破された。そして彼の四箇格言を擧げて、それを誹法であつて三惡道に墮すべき者であると難ぜられてゐる。

次に十三の得失の難に答へてある。十三失とは、善導大師の『往生禮讚』に雜修に就て、(一)雜緣亂動して正念を失す、(二)佛の本願と相應せず、(三)教と相違す、(四)佛語に順ぜず、(五)係念相續せず、(六)憶想間斷す、(七)回顧慙重眞實ならず、(八)貪瞋諸見の煩惱來りて間斷す、(九)慚愧懺悔の心有ることなし、(十)相續して彼の佛恩を念報せず、(十一)心輕慢を生じて業行を作すと雖も常に名利と相應す、(十二)人我自ら覆ふて同行善知

識に親近せず、(十三)樂こゝろみて雜緣に近づきて往生の正行を自障障他す、と缺點を列擧してある。然に是は皆佛説に任せての解釋で、善導の獨斷ではなく、事實に於て雜修には十三の失があるので、決して誹法ではないと對破なされた。而して「千中無一」を指の釋に就ては、雜行を修する者は皆千中無一であると嫌はれたのではなくして、雜行を修する者の中で至心でない者は千中無一であるといふ意である。但し正行でも至心が無くては往生出来ない。然に正行は他力なるが故に至心具足し易く、雜行の人は自力であるから至心を具足し難いのである。

次に二河譬に別解別行の人を群賊に喩へ、衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大を惡獸に喩へたのを以て、是を誹法といふも亦言ふに足らぬ愚問である。若し聖道門の人が其教を修行して念佛を妨げぬならば、群賊には喩へないのである。然に聖道門の人が其自教を執して念佛行者を妨げるのを、群賊に喩へるのであるから、此意味に於て別解別行の下に惡見人と云つてある。又惡獸に喩へられたのは衆生の六根等で、別解別行を指すのではない。群賊と云つたのは聖道門の行體を喩へたのでなくて、念佛行者を妨げる惡見人を指すのである。即ち汝の如き「念佛は無間の業である」と説く誹法邪見の徒のことであると返難せられた。

次に『觀經』中品の説相を會釋してある。此の會通は上の第一問の三難中の第二難に對するのであるが、其答を今此處に出された所以は、善導大師が『觀經の疏』を造り「頓教一乘海」と釋されたからである。其難とは上述べた如く、『觀經』には中三品の機が彼土に往生して小乗の果を證すと説いてあるから、一乗の土ではないとの



難で有つた。是に對して此義も亦難にはならぬと斥け、諸經論を引證せられてゐる。(一)『法華經』に「十方佛土中唯有二乘法」と云つてある。然らば十方佛土中には西方淨土も無くしてはならぬ。(二)『無量壽經』には「究竟一乘至于彼岸」とある。(三)『淨土論』には「大乘善根界」とある。(四)『智度論』には「一乘清淨無量壽世界」とある。

是等經論の文に見れば、西方淨土は一乗の土である事は明かである。但し中三品の小果は諸行往生の相で、小乗の機の得益であるが、遂には廻心向大するから大乘善根界たるに妨とはならない。(五)『涅槃經』には「一乗と云ふは名けて佛性とす、この義を以ての故に、我れ一切の衆生に佛性有りと説く」と云つてある。然ば如何なる衆生も淨土に生れて永く小果に止る者はないのであると、會通せられてゐる。

(b) 法然上人の釋を會す 法然上人の『選擇集』には、定・散二善の諸行往生を(要門に約して)許してある。其中に讀誦大乘を釋して、「願くは西方の行者各々其意樂に隨つて、或は『法華』を讀誦して以て往生の業とし、或は『華嚴』を讀誦して以て往生の業とす。(中略)是即ち淨土宗の『觀無量壽經』の意なり」と云つてある。かくの如く『法華』等の大乘經典を讀誦する者の西方往生が許されてゐるのに、是を謗法とすることは何事であるか。また『選擇集』に「捨閉」とあるのは、定・散の諸行を修し得ざる機に對して、易行の念佛を修することを勸めんが爲に、「捨閉」と云つたのである。彌陀の本願は選取であるから、所捨は諸行で所取は念佛である。是は

佛の本願に據りて餘行を捨閉閉せよと云つたので、餘行に堪え難い者を正機とするのが彌陀の本願である。此本願の意を説くのを謗法とすることは何事であるか。

次に「廢立」を論ずるのは謗法であるとの難を會してある。凡そ淨土の三部經の説相を見ると、『大經の三輩段』には念佛と諸行とが雜へて説かれ、『觀經』には一行々に九品往生の旨を明し、『小經』には諸行を説かずして「唯執持名號を以て得生彼國」と説き、「不可少善根福德因緣得生彼國」とされてゐる。此三經の説相に據つて、廢・助・傍の三義を釋出せられた。然に廢立の一義を指摘して謗法といふならば、『小經』の説相を如何にするのであるか。次で歷劫迂廻の難を會して云く。凡そ聖道門を捨て、淨土門に歸する事が、淨土門の大綱であり本意である。聖道門は此土の入聖得果であるから難行難證であり、淨土門は彼土の入證得果であるから易行易往であり、煩惱を斷せずして直ちに報土に生れ、横さまに五惡趣を截ち、道に昇ること窮り無いのである。然に眞言の説では、顯教は三劫成佛であり、眞言密教は即身成佛であるといふ。天台の説では、一乘を頓證とし三乘を歷劫と判する。けれども説宗・法華には、斷惑證理の修業が必要で、眞言には三生成佛を明し、天台には六即の位次を立て、ある。是は即ち難行道に歷劫迂廻の事實を語るものではないか。若し法華を難行道に攝したからとて是を謗法とするならば、天台大師をも謗法の罪人と言はねばなるまい。何となれば、彼の大師は法華三昧を得た人であるのに、其臨終には『法華經』を手に執つて、「この妙法華は悟り難く入り難し。且く措いて

論ぜず」と言ひ、次に「觀經」を執つて、「即ち西方に詣で、佛に遇ふて悟を開かん」と云はれた事が、「大師別傳」に誌されてゐるからである。

(3) 謗法を誡む 『法華』の信者は餘法を謗るべからず、他人の過とがを説くべからず、『法華』を信じて餘法を謗り、他人の過とがを説くならば、『孝經』を以て親の頭を打つが如しと言つて、『法華經』の三文(『安樂行品』の『譬喩品』と『方便品』)を引證して謗法を誡めてある。更に『涅槃經』の「惡罵等に於て怖懼無し、惡知識に於て畏懼の心を生ず。何を以ての故に、此惡罵等は唯能く身を壞して心を壞すること能はざれども、惡知識は(身をも心をも)二俱に壞するが故なり」の文を擧げて、汝は惡知識である、惡見の謗法を犯す者であるぞと、彼等日蓮宗徒に反省を促されたのである。

### 第二項 爾前方便の難を會し『觀經』の得益を示す

爾前の經及びその經を所依としたる論を用ゆべからずと云ふは、是亦甚だ獨斷であり、勝手な妄説といはねばならぬ。たとへ百歩を譲つて、爾前の教には得益なしとしても、『觀經』の得益は爾前の教に準じてはならぬ。爾前の他の諸經は難行道、自力、此土入聖の法であり、此の『觀經』は易行道、他力、彼土得證の法であるから、その教門の異なるだけに利益も亦同じくはない。就中『觀經』が『法華』と同時の説である事は、『善見論』にも『涅槃經』にも分明に説かれてゐるから、『觀經』爾前の經とするを得ないと示された。

### 第三項 己身彌陀の難を反破す

『法華經』藥王品所説の「即往安樂世界の阿彌陀」は、西方の阿彌陀に非ずして己心の彌陀であるといふ難は、是亦答ふるに足らぬ問である。抑も己心の彌陀は法身の理佛である、法身の理佛は不生不滅である。『心地觀經』に「法身の體は諸の衆生に遍くして、萬德凝然として性、常住なり。生ぜず滅せず、去來なく、一ならず異ならず、斷常にあらず」と説いてあるではないか。然に『藥王品』には「是に於て命終して、即ち阿彌陀佛のみもとに往き、蓮華の中の寶座の上に生ず」と云つてある。此文の始終を見るに、即往安樂の「往」と生蓮華中の「生」と、往生の二字があるから、彼土得證の蓮華化生なる西方往生である事は明かである。何故に是を枉げて己心の彌陀であるなど、曲解するかと斥けられたのである。

## 第六章 第三問答（重ねて善導法然兩師謗法の難を會す）

## 第一節 問

先に善導和尚・法然上人兩師の解釋は謗法の難を招くものではないと、會通せられたけれども、彼日蓮宗徒は未だ其難を免れないとして問難を立てるのである。其故は『撰擇集』の第十一章に、「雜善に約對して念佛を讚歎する文」と標して「同經の疏、（善導の『觀經疏』）に云く若念佛者より下、生諸佛家に至る已來は、正しく念佛三昧の功能超絶して、實に雜善を以て比類となすを得ざるを顯はす。（中略）若し念佛する者は、即ち是人中の好人なり、人中の妙好人なり」と善導和尚の文を引き、『御私釋』には「此經に既に定散の諸善並に念佛の行を説きて、而も其中に於て、獨り念佛を標して分陀利に喩ふ。雜善に待するに非ずば、云何能く念佛の功の餘善諸行に超えたる事を顯はさんや。然ば則ち念佛する者は即ち是人中の好人と言ふは、是惡に待して而も美る所なり。人中の妙好人と言ふは、是龜惡に待して而も稱する所なり」と云はれてゐる。

此兩師の文の意は、念佛を讚歎する爲に、『法華』等の諸善を皆悉く雜行と名け、剩へ念佛者を惡人に對して好人と稱し、更に龜惡に對して妙好人と名ける、即ち『法華』等を惡とし龜惡とするのである。然に『法華經』は一大事因縁の故に説かれた經で、諸佛出世の本懷は此經に限る。是を雜行中に攝して、而か龜惡とするは實に謗法ではないかと、重ねて問難を立てたのである。

## 第二節 答

## 第一項 善導大師の釋を會す

(1) 念佛の超絶を釋顯す 答へて云く、此難は悉く當らない、精細に文の始終を見ねばならぬ。念佛三昧功能超絶と云はれたのは、念佛は本願の行であるから諸善に超過して、實に雜善が比類するを得ないことを顯はさんが爲である。是は即ち念佛性と諸行法との勝劣を相對させたのである。念佛は本願の故に勝であり、諸行は非本願の故に劣であると、法と法との相對でこそあれ、念佛を善とし諸行を惡とするのではないと釋顯せられたのである。

(2) 分陀利華を釋す 念佛は上述の如く勝れた法であるから、念佛の行者を分陀利華（白蓮華）に喩へたのである。分陀利華は華中の勝れたもの故に、念佛行者を人中の好華・上々華・妙好華と名け、亦は人中の好人とも、妙好人とも、希有人等とも云はれるのである。『觀經』には「若念佛者（中略）是人中分陀利華」と説いてある。此若念佛者の「者」は「人」を示す文字で、分陀利を法に喩へたのではない。妙好人と云つて妙に對して龜を出

し、好に對して惡を擧げても、念佛行者の機と諸行の機との機々相對で、法と法との魚妙・好惡を相對するのではないから、決して『法華』の法を誹謗する意ではない。

以上法に約しての相對と、機に約しての相對と二釋を出して、彼宗徒の蒙を啓き、以て善導大師に對する難問を斥けられた。

第二項 法然上人の釋を會す

(1) 機々相對について 法然上人は「念佛する者は即ち是人中の好人といふは、これ惡に待して而も美る所なり」と、念佛の機と諸行の機とを相對して釋された、是は字訓に就て好惡相對した迄である。強ちに法華の行者を惡人であるといふ意味ではない。好惡相對の惡は好に對してゐるので、善に對するのではない。惡とは云つたけれども、決して不善の意でない。

(2) 法々相對に就て 法と法との相對には、勝劣を以つて判ずるけれども、善惡相對して諸行を惡と名けた事はないと、『散善義』の文を引いて是を照合し、更に『撰擇集、後序』の「夫れ速に生死を離れんと欲はゞ、二種の勝法の中に且く聖道門を開きて、選んで淨土門に入れ」と云へる文を擧げてある。即ち既に此くの如く二種の勝法と云つてある、念佛と諸行と二種を共に勝法と云つて、決して聖道門を惡とは云つてない。然るに是を誤解して、難を構へるのは輕卒ぞと返破せられたのである。

(3) 諸行往生を明すことを示す 機々相對にせよ、法々相對にせよ、決して諸行を不善とは云つてなく、『法華』を惡法なりと謗りはせない。のみならず『撰擇集』一部に互り、所々に諸行往生を明してある。若し汝が難するが如く、諸行を惡と名けられたとすれば、諸行往生の旨を明されやう筈がない。『撰擇集』には『觀音授記經』を引いてあるが、是も諸行往生の支證となるではないか。又其『付屬章』に至ては『觀經』定善の初、日想觀から終の下品下生に至るまで、定・散二善悉く皆往生を明して、是即ち淨土宗の『觀無量壽經』の意であると結んでゐる。斯様に諸行を惡とは云はぬばかりでなく、諸行往生を許してあるからには、汝の難問は取るにも足らぬと斥けられたのである。

## 第七章 第四問答

### 第一節 問

日蓮宗徒は難じて云く、上に『觀經』と『法華』と同時の説であると云はれたけれども、それは經文に背き道理に違するものである。まづ經文に背くといふのは、阿闍世が逆罪を興したのは提婆・雨行等の教によるものであるから、『觀經』に「隨順調達惡友之教」と説いてある。然に爾前の經なる『大方便佛報恩經』に提婆の入滅が説かれてゐるが、『法華』以前に入滅した提婆が、『法華』説法の時に蘇生して、阿闍世に勸めて逆罪を作らせるといふことは『報恩經』の文に背く。故に『觀經』と『法華』とが同時の説であるとは認められない。又『觀經』には阿闍世太子と説いてあり、『法華經、序品』の同聞衆には韋提希子阿闍世王と説かれてある。此二經の文を見るに、太子は前であり、王は後である。此故に『觀經』を『法華』同時の説といふとは出來ぬ。」次に道理に違すと『法華』は「正直に方便を捨て、但無上道を説く」ところの、一切皆成佛の教であるが、斯る深法を聞いて如何にして阿闍世が惡逆を起し、父を殺し母を害しやうぞ。即ち阿闍世は『法華』以前に逆罪を犯し、後に懺悔して『法華』の會座に列つた者である。かくて道理上から云つても『觀經』は『法華』以前の説でなくてはならぬと難を立てた。

### 第二節 答

#### 第一項 經の文に違すると云ふ難を會す

(1) 提婆の入滅を會す 汝等は、爾前の教をば方便であると云つて、是を取らず用ゐない。然に『法華』以前の經なる『報恩經』を、何故に證として提婆の入滅を論するのであるかと一蹴された。

(2) 『涅槃經』を引いて二經同時を示す (a) 『迦葉品』の文 『涅槃經』は汝の信する經であるが、それに據つても『觀經』と『法華經』とは同時の説なるとは明かである。即ち『涅槃經の迦葉菩薩品』に言く「善見太子(阿闍世太子)は、父頻婆沙羅王が喪くられたのを見て、後悔の心を起した。雨行大臣は又種々な惡邪の法を太子に説き聞かせて云はく、大王(太子を指す)の一切の業行が罪ではない、何故に後悔をなさるであるかと名醫耆婆は又大王よ大王の作した業は二重の罪を兼ねてゐる。即ち父を殺した罪と、須陀洹果(小乗の初果)の聖者(父王を指す)を殺した罪と二重の罪を犯したのである。斯る罪を除き給ふ方は佛より外にはないと申した。善見王は云はく、如來は清淨にましまして、穢濁があらせられない。我等罪人は如何にして如來を見奉る事が出來やうと。此時佛は是を知らしめして、阿難に告げ給ふた。三月を過ぎ已れば我は涅槃に入るであらうと。阿難か

ら是を聞いて善見太子は、直に如來の御許に詣でた。如來の說法を聞いた太子は、重罪が薄くなつて無根の信を得た。(取意)。此經文に據れば、阿闍世太子が逆害を起し父王を死に至らしめたのは、如來入涅槃の三月前の事である。然に『法華經』は、佛の入滅まで八年に渉る御說法であるから、『觀經』と『法華』とは同時期に於る說法と云はねばならぬ。(阿闍世太子の得た無根の信とは、他力眞實の信心である。貪瞋煩惱の中に生ずる清淨の信心であるから、無根の信といふのである)。

(b)『梵行品』の文 宗祖聖人は『御本典の信卷』末に、此『梵行品』の文を御引用なされてある。其文に言く「佛が諸の大衆にお告げなされるやう。一切衆生が佛果を得る爲の近因縁は、善友に如く者はない。阿闍世王が若し善友たる耆婆の語に順はなかつたならば、來月七日に必ず命終して阿鼻地獄に墮するであらう。是故に菩提の爲の近因は、善友に如く者はないのであると。阿闍世王は其時、佛の御許に詣でるべく、眷屬と共に大行列をなして進んでゐたが、其途上に於て耆婆から次の様な話を聞いた。舍婆提毘瑠璃王は釋迦族を虐殺した悪王で佛が瑠璃王は今日から七日目に火に焼けて死ぬだらうと仰せられた。瑠璃王は水中に居れば安全だと思ひ、舟に乗つて海に出て居たけれども、自然に火が水中から出て舟の上で焼死した。瞿迦離比丘は提婆達多の弟子で有つたが、舍利弗と目蓮とを陥れやうとして、無實の悪い噂を言ひ觸らしたので、生きながら大紅蓮地獄に入つた。また須那利多是種々の惡業を作つたけれども、佛所に至て善心を生じ衆罪を滅する事を得たと。此話を聞いた阿

闍世王は自分が瞿迦離の如く墮獄すべきか、須那利多の如く滅罪すべきか、明にわからない。そこで耆婆に向つて云く、我は汝と同じい象に乗り度い。たとへ我が阿鼻地獄に墮ちんとしても、汝は我を捉へて墮獄せしめないで欲しいと。(取意)。此文を引かれたのは、闍王の興逆が『涅槃』說法の前であり、従つて『觀經』と『法華』とは同時に説かれた事を、證明せられたのである。

(c) 自義を成立す 前に引いた二つの經文に據て考へると、阿闍世王が『法華經』の序分では同聞衆の中に連つて居るけれども、まだ正説を聞いて居らぬ、それ故に逆罪を造つたのである。逆罪を犯してから、阿闍世王は釋尊の御許へ詣で、居ない。『涅槃經』をお説きになる時に至て闍王は耆婆の勧めに由り佛處に詣で、佛は闍王のため法をお説きになり、闍王は法を聞いて滅罪得益したのである。然に若し汝の所説の如く、闍王の逆罪を興したのが『法華』已前である(此説は『觀經』を以て爾前の方便教とする意である)とするならば、逆罪を犯したとはいへ法華の會座に列して深法を聞いた後に、如何なる咎が有つて阿鼻獄に墮すべきであらうぞ。又もし『法華』の座に列つて、正説を聞いても、尙以前の逆罪の餘殃が残つてゐて、阿鼻獄に墮するであらうと云ふならば、「一切衆生皆佛道に入る」といふ『法華經』の文と相違して來る。故に『觀經』は『法華』同時の説である事を知るべきである。

(3) 太子と世王との相違を會す

(a) 總破 次に『觀經』には阿闍世太子と説き、『法華』には阿闍世王と説いてあるからとて、『觀經』は『法華』同時の説でないといふ難も取るに足らぬ。阿闍世を太子と説き、或は王と説くのは、義に従ひ表現を異にするのみで有つて、太子は前、王は後と定つて居るわけではない。(b) 別して諸文を引く 『觀經』には「太子あり、阿闍世と名く」と言ひ、次に「時に守門人大王に白して言く、慎みて母を害すること莫れ」とある。阿闍世は父王を幽閉したけれども、父王は存命して居られたから、まだ王位には登つて居ないのである。然に守門者及び耆婆は「大王」と呼んでゐる。『涅槃經』の三十三には「諸の守人即ち太子に告げたまつる」と言ひ、次に「善見太子此語(耆婆の諫言)、を聞已りて耆婆の爲の故に即ち(母を)放捨す」と言ひ、「善見太子父の喪するを見已りて、まさに悔心を生ず」とある。父の王の喪後、なほ「太子」といひ、又『法華』已後の『涅槃經』にも「太子」とあるから、王・太子の異を以て、『觀經』と『法華經』との前後を争ふべきではない。又『善見論』に「頻婆羅王寒林城に在り、時に阿闍世太子上苾芻城に在りて政事をなす。政事によりて阿闍世王と名く」(善見毘婆娑律に此文は見えぬ、西域記に出てゐる)とあるに見ると、王・太子は時の前後を表した語でない事は明かと云はねばならぬ。

## 第二項 道理相違の難を斥く

(1) 道理を立つ 阿闍世は前述の如く、『法華經・序分』説法の座に列つて居るが、まだ正説を聞いて居ない。

其中間に逆罪を犯したので、興逆の後佛所へ詣です。『涅槃經』説法の砌、耆婆の教に隨ひ佛所へ詣でたといふ事は道理に背かぬ。『法華』の同聞衆に列りながら、後に逆罪を犯すとは不合理であるとの難も、正説を聞く已前に逆罪を犯したのであるから難として成立たない。

(2) 彼の所立を難す 汝の所説の如く、『法華』已前に逆罪を造り、逆罪已後に『法華』の座に列り、正説を聞いても逆罪が滅せず、『涅槃經』に至て阿鼻の罪業を滅し、始めて得益するとすれば、『法華』には得益が更に無し事になる。此義を主張すれば謗法を犯す者である。

(3) 權者として義を立つ 阿闍世王の興逆が、『觀經』の發起序となつてゐる。佛が『觀經』を説き給ふべき由序となる爲に、闍王が逆罪を犯したのだとも見る事が出来る。若し然りとせば阿闍世は淨土から還相廻向により現れた權者であるから、『法華』の正説を聞いて後、逆罪を興したとしても何等差支はない。闍王は『涅槃經』に至て、忽ち逆罪を滅して無根の信を得てゐる。實業の凡夫の逆罪に同じくないではないか。(宗祖聖人も『御本典の總序』及び『淨土和讃』に於て、闍王を權人と御覽なされてある。)

## 第三項 闍王の興逆は『法華』説法の當時に非すと云ふ難を斥く

(1) 問 難する者は云く。『涅槃經』を引いて『觀經』・『法華』兩經が同時の説である事を證明しやうとするのは不當である。何となれば『涅槃經』は拈捨經とも云はれ、佛一代四十餘年の經を拈捨(落穂を拾ふが如く)

した經典で、就中汝が引用せる『迦葉品』の文は、『涅槃經』説法の當時の事を語つてゐるのではない。先に引いた『迦葉品』の次上の文に據ると、惡人提婆達多是過去世の業因縁に由て、釋尊の御許に於て不善の心を生じ、佛を害し奉らうとして、種々の神通を現じ親友善見太子の敬愛を得た。善見太子は佛所に至て大衆を求め、心の儘に舍利弗等を使ひ度いと念じたので、提婆達多は即ち佛の御許に行き、「大衆を自分に付屬して下さい、自分は彼等を説法教化して調伏せしめませう」と願つた。然に佛は「大智の舍利弗にさへ、大衆を付屬しないのに、汝の如き癡人には以ての外である」と斥けられた。提婆は斯くて益々惡心を募り、「瞿曇（釋尊を指す）よ、汝は今大衆を調伏して居るが、久しからずして其勢は磨滅するだらう」と申上げたのである。

又汝が引く所の『梵行品』には、阿闍世が着婆に向つて「汝來れ、我汝と一家に乗らんと思ふ。我當に阿鼻地獄に入るべくとも、冀くは捉持して我をして墮せしめざれ」と云つたとある。『法華』の會座に列して後、何の失咎有つてか墮地獄を怖れて、着婆と一家に乗らうとするのであるか。上來の『迦葉品』・『梵行品』の如き文は『法華』説法より以前の出來事を語るものである、是如何を難じた。

(2) 答 『迦葉品』・『梵行品』の文の始から終までを見ると、『涅槃』以前の事も、『涅槃經』説法當時の事も説いてある。上に引いた如く「佛は阿難に告げ給ふた。三月を過ぎ已れば我は涅槃に入るであらうと。善見太子は是を聞いて、佛の御許に至り、法を聞いて無限の信を得た」とあるのは、『法華』説法の終から『涅槃』説法の

當時に至る時節の事である。『法華』以前に於て「三月を過ぎ已つて、吾當に涅槃すべし」と説かるゝ筈がない。従つて闍王の興逆は『法華』と同時になくてはならぬ。又、『普賢經』には「諸々の比丘に告げ給はく、三月を却りて後吾當に涅槃すべし」と有つて、前掲の『涅槃經』の文と全く同じい。『普賢經』は『法華』の結經であるから、「三月を却りて」とは『法華』以前の事でないのは明白である。又、『涅槃經』・『梵行品』に、闍王が佛所に大行列をなして詣でたと説き、闍王が其時娑羅雙樹の間に至て、如來の微妙なる眞金の山の如き三十二相八十種好を拜したとあるのも『涅槃經』説法の當時の事有つて『法華』以前の事を説いたのではない。闍王の逆罪は、『法華の序分』以後の事件で、闍王は『法華の序分』説法の時、同聞衆に列つてはゐるが正説を聞いてをらず、正説を聞かない間に逆惡を犯したのである事は明かである。従つて『觀經』と『法華』と同時の説である事も確實である。

## 第四項 『提婆品』の文を會す

(1) 問 難を立てる者は云く「三月を過ぎ已りて、吾當に涅槃すべし」との文に據て、『觀經』を『法華』同時の説とするならば、『觀經』の説かれた時は、『法華』八卷の末に當る事になる。若し然らば『法華經の提婆品』に「提婆達多去りて後、無量劫を過ぎて當に成佛を得べし。號して天王如來と言はん（中略）世界をば天道と名けん」とあるが、提婆成佛の豫言は彼の入滅後阿鼻地獄に送つたもので、若し『法華』説法の末に至て阿闍世が



逆罪を犯したとすれば、闍王が提婆の教に順ふたとは云ひ得ぬ事になるではないか。

(2) 答 是は前に述べた通りで、『觀經』を説いたのは『法華の序分』の末に當るので、『普賢經』・『涅槃經』には「三月を過ぎ已つて、吾當さに涅槃すべし」とあるから、『觀經』と『涅槃經』の中間に八箇年あるわけで、『善見論』に「阿闍世王位に登りて八箇年に佛入滅す」とあるのと同意である。故に『提婆品』に提婆成佛の豫言が説かれてゐても、時間的な矛盾はないのである。

## 第五項 『觀經』を爾前教とする難を斥く

(1) 問 難する者は云く、『觀經』が若し『法華』同時の説ならば、何故に淨土門の祖師法然上人は『觀經』を爾前の經に攝められたのか。『撰擇集』(付屬章)に、爾前の經たる『觀經』中に説く諸行往生の中に、何故に後に説かれた『法華』を攝するのかと問を出してある。祖師法然すら『觀經』を爾前の經とされたのに、末學は『法華』同時を主張するのであるかと難じた。

(2) 答 (a) 『撰擇集』を引く 天台大師は、淨土の教を方等部に攝めて爾前の經としてゐる。(天台『觀經疏』上) 今『撰擇集』は、天台の意に隨つて問を立て、答の中に自己の主張を明かにせんとしたのである。即ち今云ふ所の「攝める」とは、權・實・偏・圓等の意義を論ずるのではない。『觀經』の「讀誦大乘」といふ文は、『觀經』前後の諸大乘經を攝めてゐるとの意で、「前」といふのは『觀經』已前の諸大乘經、「後」といふのは王官

以後の諸大乘經であると、法然上人は述べ給ふた。既に「觀經已前」と簡別の言があるから、『觀經』を攝めてゐない事は明かではないか。(b) 『弘決』の釋例を引く 『弘決』(荊溪の『止觀輔行』に「徧く『法華』已前の諸經をたづぬるにまことに二乗作佛の文及び如來久成の説を明すことなし」とあるが、二乗作佛と如來久成の旨は、『法華』に至て初めて説かれた事であるから、「已前」といふのは『法華』の外を指す。此『法華』已前と『觀經』已前と、『已前』の意味は全く同じく用ゐられてゐると釋例を出されたのである。(c) 天台の判教を會す

『觀經』を若し『法華』同時の説とするならば、天台大師は過つて『觀經』を爾前の教に攝めたのであらうか。大師の意は測り難いが、試に是を會釋すると、『法華』は八箇年に互る説法で、『觀經』は僅に一日の説で而も『法華の序分』の終に當つて説かれたので、説時が此の如く短いから、方等部に屬し爾前の教に攝したではあるまいか。但し此會釋は天台の教相判釋を其儘認めた上の論であるが、『決智鈔』には淨土教独自の地位を守つて居られる。即ち「五時を立つることは天台一家の教相なり。餘宗これを守らず」と云ひ、我が眞宗には五時の教判を用ゐず、難易二道・聖淨二門の判を用ゐる事を説かれてゐる凡そ判教は各宗独自のものを持ち、以て其自宗の獨立を保證するのであるから、若し他宗の判教を其儘依用する時は、自宗の獨立を得ぬ事になるのである。然に今は判教論が主眼でないから、『觀經』が僅か一日の説法であつた事を理由として、天台が是を方等部に屬したのではあるまいかと、極めて寛容な態度を示して判教論を避けられたのである。

## 第八章 第五問答

四八

### 第一節 證文有無の検討

#### 第一項 問

彼の宗徒は云く、若し汝の説くが如くならば、淨土の教を以て釋尊出世の本懷とすべきかと、問を放つてゐる。在覺上人は是に對して「然り」とはつきり應じて居られる。彼の徒は難じて云ふ。出世の本懷は限つて『法華』にある。『法華經』には「一大事因縁の故に世に出現す」と説いてあるが、淨土の三部經にはかくの如き文はない。何故に恣たしに出世の本懷と云ふかと難じた。

#### 第二項 答

佛大悲救濟の正しい御めあては、重い苦惱に沈める衆生を先とし給ふので、『涅槃經』に七種の衆生を説いてあるが、一、常没の衆生（一闍提の人で少しも善根のない者）。二、暫く出で、還つて没する者（提婆の如き者）。三、出で終つて住する者（舍利弗・目連等）。四、出で終つて普く四方を觀する者（初果の聖者等）。五、觀終りて行く者（緣覺の人）。六、行き終つて又住する人（即ち菩薩）。七、水陸ともに行く（佛）である。此中『觀經』の念

佛は常没の衆生の爲に説かれたので、『法華』の如く第三以上の機の爲ではない。釋迦出世の本懷は出離の緣なき凡夫の爲に、本願の念佛を説く事に在つたと云ひ、經・釋の七文を引いて是を證明してある。（一）『阿彌陀經』には「舍利弗よ。當さに知るべし。我は五濁惡世に於て、此難事を行じて阿耨多羅三藐三菩提（無上佛果）を得て、一切世間の爲に、此難信の法を説くのである。是は實に至難な事である」と説き。（二）『法華經』に此小經の文を釋して「如來五濁に出現して、隨宜に方便して群萌を化す。或は多聞を説きて得度せしめ（中略）種々の法門皆解脱すれども、念佛して西方に往くに過ぎたるはなし」とある。（三）元曉の『小經疏』には「兩尊（釋迦彌陀二尊）出世の本意、四輩入道の要門。耳に經名を聞きて、一乘に入りて而も退する事なし。口に佛號を稱して、即ち三界を出で、而も歸らず」とある。（四）慧心の『彌陀經略記』には「然に信受を勸むるは、願生を成ぜんが爲也。是佛の本懷也、輕爾きやうにすべからず」と云ひ。（五）『稱讚淨土經』（『阿彌陀經』の異譯）には「又舍利子よ我はかくの如きの利益安樂大事の因縁を觀て、誠諦の語を説くのである」と説かれた。（六）『祕密四藏經』に「諸佛出世の本懷は、阿彌陀佛の功德名號である」と説いてある。（七）『無量壽經』の下卷に「無量は壽佛を念じて、其國に生れんと願ひ、若し深法を聞きて歡喜信樂して疑惑を生ぜず、乃至一念彼の佛を念じて、至誠心を以て其國に生れんと願ふ」とある。『法華經』の囑累品には「餘の深法の中に於て示教利善するであらう」と説いて、『法華』で證らぬならば、餘の深法を以て衆生を救ふとあるが、其深法とは『大經』の文に照すと、彌陀の本願でな

くてはならぬ事は既に論究された所である。是等經釋の文に據て、本願の念佛こそ釋尊出世の本懷である事が明かである。

## 第二節 本懷淺深の比較

### 第一項 問

日蓮宗の徒は『法華』こそ出世の本懷である。『法華』已前の一代の教は方便である。其故は阿含時の誘引、方便時の褒貶、般若の淘汰、それ／＼種々の利益はあるが、是等は皆『法華』一乘の方便である。故に『法華』が出世の本意でなくてはならぬ。然に淨土の經は善根功德の薄少な下劣の機に對した説であるから、以て出世本懷とはなすに足らぬ。今引用した『阿彌陀經』も、五濁惡世の類の機の爲に説かれたに過ぎぬと難じた。

### 第二項 答

(一) 三部經悲懷の説を擧ぐ 文の上から、又道理の上から、彌陀の本願を説くのが釋尊出世の本意である事は、上に答へた。就中『大經』説法の際は釋尊は諸根悅豫し、『觀經』の會座では佛は即便微笑なされ、『小經』では十方恒沙の諸佛が護念證誠なされてある。是一大事因縁、如來出世の本懷なればこそである。

(二) 苦を救ふを本とし給ふ説を擧ぐ 凡そ諸佛の出世は専ら重苦の衆生を先に救はんが爲である。先に『涅槃經』の七種の衆生の中で、常没の凡愚を目あてとし給ふ事を説いた如くである。更に諸の經論の中にも、(一)『華嚴經』の文殊讚佛の偈に「一々の地獄中に無量劫を経給ふた。衆生を濟度する爲に、能く此苦を忍ばれるのである」と説き、(二)『涅槃經』には「一切の衆生が各自所造の業力に隨つて、各自別に受ける所の苦果は、悉く是如來一人の苦である」と説き、(三)『莊嚴論』には「菩薩が衆生を念じて、是を愛する事骨髓に徹る。恒時に利益しやうと欲する事は、二子に對する如くである」と説き、(四)『大經』に、末だ五逆罪を造らぬ機には抑止して「唯五逆を除く」と説き、『觀經』に至て、已に五逆を造る機を攝取して往生を許してある。これ釋尊が造惡の衆生をして利益を得しめん爲に、種々の手段を用ゐたのである(『往生論註』「玄義分」『口傳鈔』參照)。(五)『請觀音經』に「淨土の教主彌陀如來は毘舍離國に至り、光をのべて忽ちに重病の衆生を助けて悉く安穩ならしめた」とある。(六)『觀經』華座觀の文には、王宮に於て釋尊が除苦惱法を説くぞと仰せられて、韋提夫人は空中に住立せられる、彌陀佛を見奉り、無生法忍を得たと託かせられた。然ば即ち彌陀・釋迦二尊の本意は、淨土教を先とし給ふ事が明かであると示し、ついで『華嚴經』に「如來が自在力を顯現する事は、圓滿修多羅(即ち『華嚴經』)を説く爲である」と説ける文を引用して、出世本懷の見方は必ずしも『法華經』に依ると限られぬ事を示された。

(三) 正しく淺深を決判す 『華嚴』と『法華』と『淨土三部經』との三教を出し、其出世本懷の淺深を比較す

ると、『華嚴』は厚く善根を植え秀れた機を攝するのを本懐とするが、二乗の小機を救ひ得ぬから、其力弱く、『法華』は根敗壞種の二乗に成佛の豫言を興へられた事は、『華嚴』に勝るけれども、五逆・謗法・闍提・鈍根無智の人を救ひ得ない。然に獨り淨土の法門は、特に重苦の衆生を本として救済し給ふから、到底他經と日を同じうして談るべきではない。故に諸教に超過せる出世本懷たる本願の念佛を、虚妄の法であると云ひ、無間の業であると難する如きは許し難い悪見である。深く慎まねばならぬと呵責なされた。

以上大綱五番の問答によつて、日蓮宗徒の來難を却け、以て眞宗御一流を對揚なされた存覺上人の、明快なる破邪顯正の鴻恩深く感戴すべきである。

聖典講讚全集第十回配本・昭和十年九月十日印刷  
昭和十年九月廿一日發行・編輯者宇野圓空・發行  
者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎・印  
刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・印  
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎